

## 2期目を迎えた習近平体制の行方

加藤 青 延

### 1. はじめに

中国を事実上一党独裁体制の形で支配する中国共産党は、2017年10月18日から24日まで5年に1度の党大会（第19回全国代表会議）を開き、全国40の地域や組織から選ばれた2338名の代表が中央委員204名と候補委員172名を選出した。<sup>1</sup>

新たに選出された中央委員は、党大会閉幕翌日の同月25日、中央委員会第1回総会（1中全会）を開き、習近平氏を総書記に再選すると共に、最高指導部を構成する政治局常務委員7名（習近平総書記を含む）と政治局員25名（政治局常務委員を含む）を選出し、習近平総書記をトップとする中国共産党の指導体制が2期目をスタートさせた。<sup>2</sup>

今回の党大会では、中国共産党のいわば「憲法」の役割を果たしている党規約の改正も行われ、党の行動指針として、これまで掲げてきた「マルクス・レーニン主義」、「毛沢東思想」、「鄧小平理論」、「三つの代表重要思想（江沢民の指導理念）」、「科学的発展観（胡錦濤の指導理念）」の後に、新たに「習近平による新時代の中国の特色ある社会主義思想」が書き加えられた。<sup>3</sup> 党規約の行徳指針の中に、中国人指導者の名前を冠した理念が書き込まれたのは、毛沢東と鄧小平時代以降は初めてのことで、習近平氏への権力集中の加速を示す動きとして注目された。

本論は、そうした習近平氏への権力集中が、やがては習氏に対する「個人崇拜」へとつながるのではないか。さらに、かつて神格化された毛沢東

が1960年代に発動し、中国全土に大きな混乱をもたらした多くの犠牲者を出した文化大革命への反省から、その後30年以上にわたって強調されてきた「集団指導体制」からの逸脱や、習氏とその側近らによる「専制政治」への変転が起こり得るのではないかという仮説をもとに、その傾向を裏付けつつある、党指導部人事の特徴や、習氏を別格扱いするよう求めた通達などの具体的事実を検証することで、その可能性を探り、2期目に入る習近平体制の行方を考察しようとするものである。

## 2. 新指導部人事から浮き彫りになった「習氏1強」体制

### (1) 習近平側近で固められた最高指導部

19回党大会と、それに続く1中全会を経て選出された「政治局員以上」の新指導部の顔ぶれを表に示すと以下の図表1の通りになる。

図表1 中央政治局の新指導部の顔触れと属性、抜擢状況

名前	肩書き	直前のポスト	属性（習との関係）	昇格段数
習近平	総書記 政常委	現在と同じ	★習派（本人）	0
李克強	首相 政常委	現在と同じ	☆共青团派	0
栗戰書	政常委 全人代委員長	中央弁公室主任	★習派（親友）	1
汪洋	政常委 政協主席	副首相（現）	☆共青团派	1
王滬寧	政常委 宣伝思想担当	中央政策研主任	無派閥	1
趙樂際	政常委 規律委書記	中央組織部長	★習派（陝西閩）	1
韓正	政常委	上海市党委書記	☆共青团派・江派	1
丁薛祥	政治局員 中央弁主任	総書記弁公室主任	★習派（部下・上海）	1.5（補）
王晨	政治局員 全人代副	全人代副（現）	★習派（旧友・延安）	1
劉鶴	政治局員	財經小組主任（現）	★習派（旧友・北京）	1
許其亮	政治局員 軍事委副	現在と同じ	★習派（旧友・福建）	0
孫春蘭	政治局員	統一戦線工作部長	無派閥	0
李希	政治局員 広東省書記	遼寧省書記	★習派（陝西閩）	1.5（補）

李 強	政治局員	上海市書記	江蘇省書記	★習派（部下・浙江）	(1.5)
李鴻忠	政治局員	天津市書記	現在と同じ	★習派（絶対忠誠）	1
楊潔篪	政治局員	外事弁主任	國務委員（現）	実務派	1
楊曉渡	政治局員		監察相（現）	★習派（部下・上海）	2
張又俠	政治局員	軍事委副	軍委裝備發展部長	★習派（旧友・北京）	1
陳 希	政治局員	組織部長	組織部副部長	★習派（清華大同窓）	1
陳全国	政治局員	新疆書記	現在と同じ	☆共青团派	1
陳敏爾	政治局員	重慶市書記	現在と同じ	★習派（部下・浙江）	1
胡春華	政治局員		広東省党委書記	☆共青团派	0
郭声琨	政治局員	政法委書記	國務委員（現）	■江派（曾慶紅同郷）	1
黃坤明	政治局員	宣伝部長	宣伝部副部長	★習派（部下・福浙）	1.5（補）
蔡 奇	政治局員	北京市書記	現在と同じ	★習派（部下・福浙）	2

氏名、肩書き、および昇格段数は、中国共産党が新華社を通じて公表した情報に基づき筆者が作成。属性については後述する筆者の研究分析に基づく。★は習側近（習派）、☆は胡錦濤前総書記系（共青团派）。<sup>4</sup>

この図表1から今回選出された最高指導部人事の最大の特徴は、習近平氏の側近と言われる指導者（★習派）が大量に昇格し、総書記、政治局常務委員も含めた政治局員25名中、およそ3分の2にあたる16名と圧倒的多数を占めたことがわかる。

図表1の最も右の欄に示した昇格段数とは、中国共産党の位を、一般黨員、中央委員、政治局委員、政治局常務委員、総書記の順番に下から上にランク付けした場合、一つ上のランクに昇格した場合を「1」とし、2つ上まで飛び級昇格した場合を「2」と表している。なお、「1.5」としたものは、一般黨員と中央委員の間に、中央委員が欠員となった場合に補充する要員として選ばれる候補委員が「中2階」の形で存在し、その中から中央委員を飛び越して政治局員に抜擢されたケースを示したものである。

ただ、政治局員より上の地位は、党規約上、全て前日まで開かれる19回党大会で選出された中央委員からしか選出されないため、そこで選出された19期中央委員は前職の地位としてはカウントしていない。図表1の昇格段数としては18回党大会時に中央委員候補となり、今回、中央委員

就任わずか1日にして政治局員になった丁薛祥<sup>ていせつしょう</sup>、李希<sup>りし</sup>、黄坤明<sup>こうこんめい</sup>の3氏を「1.5（補）」と表示した。また19回党大会の準備のため直前に開かれた中央委員総会（18期7中全会）で、欠員補充のため中央委員候補から中央委員に繰り上がり、極めて短期間「中央委員」として存在したものの、実質的に前期は中央委員候補であった期間が圧倒的に長かった李強氏については（1.5）とした。

この昇格段数の欄を見ればわかるように、1.5ないし2段階昇級した「抜てき組」は、筆者が習近平側近（習派）と分析する指導者ばかりであることがわかる。中国や香港の一部消息筋は今回政治局員以上に選出された指導者たちが、党規約に基づいた「中央委員による投票」と合わせて、「最高指導者の面接」によっても選抜された可能性があるとの情報を伝えている。これについては学術的にその真偽を確かめるすべはないが、習近平総書記に権力を集中する上で都合の良い恣意的な人事が行われた可能性があることを、最高指導部の中に習側近が占める割合が急増したことや、1.5段階跳び、2段階跳びのような異例の抜てき人事が6名の習側近に対してのみ行われている結果からも推測できると言えよう。ちなみに飛び級の抜てき人事は、今回政治局常務委員でない下位の政治局員に対して行われたが、その割合が18名中6名と3分の1に及んでいることも注目に値する。

また、今回の人事異動で、共産党組織を掌握するために要となる党中央組織部長（党員の人事管理部門の最高責任者）と党中央宣伝部長（全ての言論機関やインターネットを統括し、党のプロパガンダ発信と言論統制を行う部門の最高責任者）にいずれも習近平側近が就いたこと。政治局員のポストとなる主要地方指導者（北京、上海、天津、重慶という4直轄市全てと広東省の書記）も全て習側近が押えたことも習近平氏への権力集中を物語っているといえる。

## (2) 共産主義青年団出身らの派閥（共青团派）の衰退

習派（習側近）が躍進する一方で、目立って衰退したのが既存の勢力とされた江沢民派（江沢民元総書記と関係が深い指導者の集団で、その多くが経済利権を掌握し一時期は中国最大の派閥として絶大な影響力を握っていた）と共青团派（胡錦涛前総書記の出身母体である共産主義青年団出身者を中心とした政治勢力）である。江沢民派は、習近平氏が2012年の18回党大会で総書記に就任して以降、積極的に進めてきた反汚職キャンペーンで、その多くが摘発され今回の党大会を前に、事実上壊滅状態となった。

一方、中国共産党の下部団体で、エリート養成部門として多くの指導者を輩出してきた共産主義青年団（共青团）の勢力も、汚職の摘発や「官僚的である」などとの批判を受けて大幅に衰退したことが、図表2で示す党大会前の最高指導部との比較で明確になる。

図表2 前指導部と共青团の衰退

名 前	肩書き	年齢	属 性	結 果
習近平	総書記 常務委	64	★習派（本人）	変わらず
李克強	首相 常務委	62	☆共青团派	変わらず
張徳江	全人代委員長 常務委	70	■江沢民派	定年引退
俞正声	政協会議主席 常務委	72	■江沢民派・陝西閥	定年引退
劉雲山	常務委 中央書記処書記	70	☆共青团派	定年引退
王岐山	常務委 規律検査委書記	69	★習派（盟友）	政治活動継続
張高麗	常務委 筆頭副首相	70	■江沢民派	定年引退
馬 凱	副首相	71	☆共青团派 太子党	定年引退
王滬寧	党中央政策研究室主任	62	無派閥	常務委昇格
劉延東	副首相	71	☆共青团派 太子党	定年引退
劉奇葆	党書記処書記 宣伝部長	64	☆共青团派	中央委に降格↓
許其亮	軍事委副主席	67	★習派（福建）	変わらず
孫春蘭	統一戦線工作部長	67	無派閥	変わらず
孫政才	重慶市党委書記	54	実務派（江派説も）	失脚 ×

李建国	全人代副委員長	71	★習派（陝西閩）	定年引退
李源潮	国家副主席	66	☆共青团派	党員に降格 ↓
汪 洋	副首相	62	☆共青团派	常務委昇格
張春賢	党建設指導小組副組長	64	■江沢民派	中央委に降格 ↓
范長竜	軍事委副主席	70	☆軍（胡錦涛派）	定年引退
孟建柱	党政法委書記	70	■江沢民派	定年引退
趙樂際	党書記処書記 組織部長	60	★習派（陝西閩）	常務委昇格
胡春華	広東省党委書記	54	☆共青团派	昇格できず
栗戦書	書記処書記 弁公室主任	67	★習派（河北）	常務委昇格
郭金竜	前北京市党委書記	70	☆共青团派	定年引退
韓 正	上海市党委書記	63	☆共青团派・江派	常務委昇格

氏名、肩書は、中国共産党が新華社を通じて公表した情報に基づき筆者が作成。属性については後述する筆者の研究分析に基づく。★は習側近（習派）、☆は胡錦涛前総書記系（共青团派） ■は江沢民派

図表2の通り、政治局員以上の前最高指導部25名のうち11名が定年で引退する形になった。中国共産党最高指導部の引退年齢については明確な規定はないが、党大会の行われる年に68歳以上に達すれば引退し、67歳以下なら継続できるという「7上8下」と呼ばれる不文律があると言われ、今回円満な形で引退した11名は、その不文律に沿う形となった。

最高指導部7名の政治局常務委員の中では、江沢民派とされた4名と習近平氏の盟友とされた王岐山氏の計5名が退き、その後を下位の政治局員から5名が常務委員に昇格したが、属性別に分類すると、習派2名、共青团出身2名、無派閥1名と一応バランスが取れている。

一方で、一般の政治局員の中には、定年年齢に達していないにもかかわらず退く形になった指導者が4名おり、中央委員への降格2名（劉奇葆氏・共青团派、張春賢・江沢民派）、党員への降格1名（李源潮氏・共青团派）、失脚・刑事訴追1名（孫政才氏・実務派）となっている。いずれも香港や日本のメディアなどで習派と対立ないし抵抗したと伝えられた経緯のある指導者であり、異論を排除し、忠誠を誓わないものは容赦なく失

脚させるという習近平指導部の専制的な政治手法を匂わせるものといえよう。

図表 1 と図表 2 から新指導部と旧指導部の派閥属性の割合を比較すると以下の図表 3 のようになる。

図表 3 最高指導部の交代で判明した各勢力の変化（人数）

属性	旧指導部	新指導部	増減
★習派	6	16	△10
☆共青团派	11	5	▼ 6
■江沢民派	5	1	▼ 4
その他	3	3	—

この表からもわかるように、今回の最高指導部の交代で、習派は3倍近い（2.7倍）勢力拡大を果たし大幅に躍進した。一方、共青团派は半分以下に減少、江沢民派に至っては完全に少数派に激減し、政治的な影響力はほぼなくなったと見てとることができる。

現在、中国共産党内には、共青团のように全国規模で政治力を発揮できる組織集団や、江沢民派のように経済界と利権で結びつき権力を維持してきた大規模な組織的勢力が他に存在しないことから、共青团派の衰退と江沢民派の事実上壊滅によって、習派の事実上「1強」支配体制が確立されたと見ることができる。

### 3. 習近平指導部を固めた「習派」とはどのような人たちか

今回の党大会でその勢力を急速に伸ばした「習派」とはどのような人たちで、習近平氏と、どのような関係で結びついているのか。それを探り出す方法として、中国共産党が公表している「習近平氏自身の経歴」と、「今回昇格を果たした指導者たちの経歴」を重ね合わせる作業を行った。また、習近平氏の「父親である習仲勲しゅうちゅうくん氏の経歴」に基づき当時の習一家

の交友関係も合わせて調査したところ、習派と言われる習氏の支持母体となっている党幹部には次の4つの類型があることが浮かび上がってきた。

それは、①習近平氏が少年期に親しくしていた友人（類型1 幼馴染み型）、②習近平氏が地方指導者として地方で仕事をしていた際に知り合った同僚（類型2 戦友型）③習近平氏が地方指導者として地方で仕事していた際に習氏に仕え、信頼を勝ち取り引き上げられた部下たち（類型3 直参旗本型）④習近平氏の本籍地で父親習仲勲氏が育った故郷陝西省とつながりを持つタイプ（類型4 同郷地縁型）である。また習近平氏が最高指導者に昇格して以降、習氏に「絶対忠誠」を誓った本来無派閥のタイプ（類型5 譜代大名型）や、本来は対立派閥に属していたが、今は習氏に忠誠を誓うことで勢力を保っている非習派のタイプ（類型6 外様大名型）があることも浮き彫りになった。（図表4）

図表4 「習派」と「非習派」の分類

類型1	幼馴染み型（少年期の友人）⇒習派
類型2	戦友型（末端幹部時代の知人・友人）⇒習派
類型3	直参旗本型（地方政府幹部時代の直属部下）⇒習派
類型4	同郷地縁型（陝西閥）⇒習派
類型5	譜代大名型（後から忠誠を誓い傘下に）⇒無派閥
類型6	外様大名型（本来は対立派閥）⇒非習派

ここで今回、新たに最高指導部に選ばれた習近平氏本人を除く24名の政治局員以上の指導者について、筆者が考案した類型にわけて分類すると以下の図表5のようになる。

図表5 新たな最高指導部（政治局員以上）の習氏との類型別関係

類型	属性	該当する指導者
幼馴染み型	習派	張又俠、劉鶴
戦友型	習派	栗戰書、王晨、陳希、許其亮
直参旗本型	習派	丁薛祥、李強、楊曉渡、陳敏爾、黃坤明、蔡奇



同郷地縁型	習派	趙樂際、李希
譜代大名型	無派閥か習派	王滬寧、孫春蘭、李鴻忠、楊潔篪
外様大名型	非習派	李克強、汪洋、韓正、陳全国、胡春華、郭声琨

この図表5からもわかるように新指導部の発足に伴い、次々に昇格した指導者の多くが類型1～4に属し、習近平氏がかなり長期にわたり交流を持ち続けたり、目をかけてきたりした人たちであることが判る。

そこで筆者は習近平氏がその時々で関わった指導者、そして今回の新指導部発足においてどのような昇格を果たしたかを、おのおのの経歴を重ね合わせることで、系統的に分析した一覧表（図表6）及び「地縁血縁」でのつながりを示す陝西省閥一覧（図表7）を作成したのでここに記す。

図表6 習近平氏の経歴とその時々友人・部下、および彼らの昇格との関係

習近平氏の経歴	友人・部下	友人・部下の地位（今回の昇格）
1953年6月 習近平氏誕生 少年時代 文化大革命が起こり父親・習仲勳が失脚。辛い日々を送る	張又俠（親友） 劉鶴（親友）	今回 政治局員・軍事委副主席に昇格！ 今回 政治局員に昇格！ 中央財經領導小組主任
1969年～1975年 陝西省下放時代 陝西省延川縣文安駅公社梁家河大隊に入隊、同隊党支部書記に	王岐山（盟友） 王晨（友人）	政治局常務委員として共に反腐敗キャンペーンを展開するも今回引退 ただ国会の要職に就く見通し 今回 政治局員に昇格！ 全人代常務副委員長
1975年～1979年 清華大学で学生生活を共に	陳希（ルームメイト）	今回 党中央組織部長（党人事掌握） 政治局員に昇格！
1979年～1982年 耿飈国防相の秘書 軍籍取得	若手軍幹部と多数交流	多くが軍上層部の幹部に
1982年～1983年 河北省 自らの意思で河北省正定縣の党委書記に	栗戰書（隣村幹部意気投合）	今回 政治局常務委員に昇格！ 習氏を支える譜代大名的存在

習近平氏の経歴	友人・部下	友人・部下の地位（今回の昇格）
<p>1985年～2002年 福建省指導者の時期</p> <p>アモイ副市長を最初に、福州市党委書記、福建省副省長、同省長などを歴任 途中1998年～2000年に清華大学人文社会科学院大学院で学び博士号を取得（陳希氏の支援あり） 福建省幹部時代は、福州分軍区第一書記や福建省高射砲予備役師団第一政治委員など軍の役職にも就き、福建省の軍人との交流も頻繁だった。</p>	<p>蔡奇（部下）</p> <p>黄坤明（部下）</p> <p>何立峰（部下）</p> <p>許其亮（軍友人）</p> <p>苗華（軍友人）</p> <p>韓衛国（軍友人）</p> <p>丁来杭（軍友人）</p> <p>劉賜貴（軍友人）</p> <p>王小洪（部下）</p>	<p>今回 政治局員に昇格！（2段跳） 北京市書記 福建から浙江まで習と共に移動直参旗本型</p> <p>今回 政治局員に昇格！ 党中央宣伝部長にも昇格！</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 国家發展改革委主任</p> <p>政治局員・軍事委副主席を継続</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 中央軍事委員</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 陸軍司令官</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 空軍司令官</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 海南省党委書記</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 公安部次官（次の公安相候補）</p>
<p>2002年～2007年 浙江省指導者の時期</p> <p>浙江省代理省長から浙江省党委書記、中央委員に昇格。 ★習を支える「之江新軍」と呼ばれる支持集団を形成。之江とは浙江省を流れる銭塘江の事。</p>	<p>李強（部下）</p> <p>陳敏爾（部下）</p> <p>バヤンチャオル（蒙古族）</p> <p>鐘山（部下）</p> <p>劉奇（部下）</p> <p>楼陽生（部下）</p> <p>応勇</p>	<p>今回 政治局員に昇格！ 上海市党委書記にも！</p> <p>今回 政治局員に昇格！ 重慶市党委書記</p> <p>吉林省党委書記 中央委員継続</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 商務相</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 江西省省長</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 山西省省長</p> <p>今回 中央委員に昇格！ 上海市長</p>

習近平氏の経歴	友人・部下	友人・部下の地位（今回の昇格）
2007年3月～10月 上海市委常委書記の時期 江沢民派のホープ 陳良宇 の失脚で急遽上海市委常委書記に ★わずかな期間だが、着実に信頼できる部下を養成した	丁薛祥（秘書）  楊曉渡（部下）  徐麟（部下）  陳豪（部下） 杜家毫（部下）	今回 政治局員に昇格！ 党中央弁公室主任にも昇格！ 上海時代から習の秘書を務め、習の政治参謀と言われる 今回 政治局員に昇格！ 監察相として反汚職キャンペーン主導 今回 中央委員に昇格！ 上海の下級役人の中から習が目をつけ抜擢。現在は中央宣伝部副部長、中央ネット安全情報化領導小組主任として、中国のインターネット管理の先頭に。 今回 中央委員に昇格！ 雲南省党委書記 今回 中央委員委に昇格！ 湖南省党委書記

中国共産党発表の経歴などより筆者作成

図表7 陝西省と関わりがあるグループ 習近平の原籍 陝西省富平県

俞正声 趙楽際 栗戦書 李 希 李建国	人民政治協商會議主席 陝西省生まれ 今春引退 陝西省党委書記経験 今回 政治局常務委員 規律検査委書記に！ 陝西省党委副書記経験 今回 政治局常務委員に！ 陝西省党委常務委員、秘書長、延安市党委書記等経験 今回政治局員に！ 全人代常務副委員長 陝西省党委書記経験 今春引退
---------------------------------	--

中国共産党発表の経歴などより筆者作成

以上の図表による分析によっても明らかなように、習近平氏は自らの半生の中で、特定の時期や場所で知り合った友人や知人を重視するのではなく、それぞれの時間と場所において知り合った友人や知人の中で信頼できる仲間を万遍なく守り続け、互いに関係を保ち続けてきたいわば「習氏のお気に入り」によって習派の主流が形成されている実態がわかる。それはあたかも、封建的時代のような地縁血縁、「御恩と奉公」のつながりにも類似しており、習指導部が公式の場では「法治主義」を声高に唱えていながら、実際には極めて「人治主義」的な統治を行っていることを示すものといえる。

#### 4. 習派を大量昇格させるために行われた人事操作

以上見てきたように、今回の最高指導部人事の交代にあたって、習近平氏とつながりが深い指導者が大量に昇格を果たし、指導部の3分の2近くを占める形となったが、それを実現するために、習近平氏が総書記、国家主席という党、国家の最高ポストに就任して以来、5年間という準備期間を設け、周到かつ巧妙に人事の駒を進めてきたことが、個別の指導者の経歴を分析すると見えてくる。

まず注目すべきは、今回、政治局員と党中央組織部長に昇格した陳希氏の存在である。陳希氏の経歴を示すと、陳氏は1953年9月生まれで、習近平氏と同一年である。しかも、習近平氏が1975年から79年にかけて中国一の理工系大学、清華大学で学んだ際、4年間同じ寮の同じ部屋で過ごしたルームメイトだったことで知られる。思春期の多感な年月を4年間、毎日共に過ごし人生を語り合ったとされ、互いに相手の心の内を熟知し合った仲だといえる。陳氏は頭脳明晰で、習氏が大学を卒業した後も、大学に留まり同大学の教員となり、2002年から2008年まで同大学の党委員会書記に就いている。陳氏は福建省福州市の出身で、大学を卒業した習近平氏が、1985年から2002年まで福建省に勤務したことも、陳氏と習氏の間を一層強める形になったと考えられる。習氏は福建省勤務を続けた17年間のうち、1998年～2000年の2年間、清華大学に戻り人文社会科学院大学院で学び博士号を取得したが、福建省に職場を残しながら清華大学の大学院で博士号を取得することができたのは、かつてのルームメイト陳氏の支援があったからこそできたと考えられる。

また、習近平氏の勤務地福建省が、陳氏の生まれ故郷でもあり、その故郷で大きな権力を手にした習氏と、頭脳明晰で清華大学で活躍中の陳氏の間には、持ちつ持たれつという相互依存の関係が続いていたことも容易に推測できる。

習近平氏が政治局常務委員として北京の中央指導者に昇格した翌年の

2008年、陳氏は清華大学を離れて政府官庁の一つである教育部（教育省）次官に就任し、学術界から行政・政治分野の指導者に転身した。さらに習近平氏が中国共産党のトップ総書記に就任した翌2013年には、党中央組織部の筆頭副部長になった。党中央組織部は、中国共産党員の全てのデータを管理し、その人事を全て把握している部門であり、習近平氏は頭脳明晰で信頼できる親友の陳氏を、この人事管理部門のナンバー2に送り込むことで、その後、習近平氏と結びつきが深い多くの「習派」指導者たちの出世の道筋を構築させたと言えるだろう。



陳 希氏  
インターネットより

中国共産党の最高指導部政治局常務委員のメンバーになるためには「少なくとも地方2カ所で行政ないし党のトップとして実績を積んだ経験がある指導者がふさわしい」という不文律があるとされてきた。実際、主な指導者の経歴を調べると、例外はあるもののほぼそれと符合する。（図表8）

図表8 政治局常務委員の地方経歴

指導者名	属性	主な地方トップ経歴1	主な地方トップ経歴2
習近平	習派	浙江省党委書記	上海市党委書記
李克強	共青团派	河南省党委書記	遼寧省党委書記
栗戦書	習派	黒竜江省長	貴州省党委書記
汪 洋	共青团派	重慶市党委書記	広東省党委書記
王滬寧	無派閥	経験なし	経験なし
趙楽際	習派	青海省党委書記	陝西省党委書記
韓 正	共青团派	上海市長	上海市党委書記

中国共産党発表の経歴より筆者作成

こうしてみると、習派の権力構造を固めるためには、いかにして多くの若手習派指導者たちに、地方2カ所のトップを経験させるかが重要な要素となり、党中央組織部では、膨大な党員のデータの中から順列組合せを選

びぬき、巧みな出世コースの構築が行われた、或いは行われつつあると筆者は推察する。

今回、政治局員として顔を連ねているメンバーについてまとめると以下の図表9のようになる。

図表9 政治局員の地方トップの経歴

指導者名	属性	年齢	主な地方トップ経歴 1	主な地方トップ経歴 2
丁薛祥	習派	55	元来秘書で経験なし	経験なし
王 晨	習派	67	元来報道畑で経験なし	経験なし
劉 鶴	習派	65	元来経済学者で経験なし	経験なし
許其亮	習派	67	軍人のため経験なし	経験なし
孫春蘭	無派閥	67	福建省党委書記	天津市党委書記
李 希	習派	61	遼寧省党委書記	広東省党委書記
李 強	習派	58	江蘇省党委書記	上海市党委書記
李鴻忠	習派	61	湖北省党委書記	天津市党委書記
楊潔篪	無派閥	67	元来外交官で経験なし	経験なし
楊曉渡	習派	64	(チベット自治区副主席)	(上海市党規律委書記)
張又俠	習派	67	元来軍人で経験なし	経験なし
陳 希	習派	64	元来学者で経験なし	経験なし
陳全国	共青团派	62	チベット自治区党委書記	ウイグル自治区党委書記
陳敏爾	習派	57	貴州省党委書記	重慶市党委書記
胡春華	共青团派	54	内モンゴル自治区党委書記	広東省党委書記
郭声琨	江沢民派	63	広西チワン族自治区党委書記	(公安部長)
黄坤明	習派	61	(浙江省杭州市党委書記)	
蔡 奇	習派	62	北京市長	北京市党委書記

中国共産党発表の経歴より筆者作成

このうち、68歳定年という不文律を考慮すると、5年後に続投できる年齢、つまり62歳以下の指導者は、習派7名と共青团派2名になる。また10年後以降も続投可能、つまり57歳以下の指導者は、習派2名、共青团派1名となる。また政治局常務委員になるためには、地方2カ所でトップ

を務めた経歴が必要だとする不文律で見た場合、次期政治局常務委員候補は、習派の李希、李強、李鴻忠、陳敏爾、蔡奇各氏の5名。共青团派の陳全国、胡春華各氏の2名。その中で、10年先以降に現役でいられるのは、習派の陳敏爾氏と、共青团派の胡春華氏に絞られる。この二人がポスト習近平候補と言われた由縁でもある。

習近平指導部が、今回自派の指導者を政治局員入りさせるために、障害となる別派閥の指導者を排除し、出世コースを作り出したケースも散見された。

前述したように政治局員になるためには、元来は、地方のトップの経験が2つ以上経験していることが望ましいとされてきた。普通は、「地方Aトップ⇒地方Bトップ⇒中央の役職（政治局員）」という出世の道をたどるが、手取り早いのは、北京、上海、天津、重慶、広東省といった政治局員のポストが事実上割り当てられている地方のトップになる事である。

つまり、「地方Aトップ⇒地方Bトップ（政治局員）」という2段階で政治局員にのし上がるコースがある。そのようなやり方で今回一気に昇格を果たしたいずれも習派の蔡奇氏と陳敏爾氏のケースを見てみたい。

#### (1) 一般党員から2段跳びで政治局員に昇格した蔡奇氏の離れ業

習近平氏にとっては福建省から浙江省にいたるまで部下として付き従い、旗本直参型の指導者である蔡奇氏を政治局員にすることが大きな支えとなると考えられた。そこで目を付けたのが、政治局員の資格を持つ北京市のトップの党委書記の座をねらうことだったようだ。

北京市の党委書記には、共青团派の重鎮で胡錦涛前総書記と密接な関係にあった郭金竜氏が就いていたため、いきなりこの座をねらうことは、共青团派の大きな反発を買う恐れがあった。ただ、郭金竜氏は2017年には定年年齢に達し、そのポストが空くことも分かっていた。当初、中央委員でもなく一般党員でしかなかった蔡奇氏がいきなりその空席を埋めることには無理もあった。

そこで狙われたのが瓦解しつつあった江沢民派に属する王安順北京市長の排除だった。2016年10月王安順北京市長は突然閑職に左遷され、後任の「北京市長代理」として蔡奇氏が送り込まれたのである。蔡奇氏は翌月には北京市長に選出され、まず地方行政のトップの座を一つ確保した。さらに翌2017年5月、共青团派の郭金竜党委書記が予定通り引退すると、蔡奇氏はその穴を埋める形ですかさず市長から党委書記へと昇格した。市長としての勤務期間は半年にすぎなかったが、蔡奇氏は、北京市長、北京市党委書記という2つのポストを歴任した形で、一般党員から短期間で政治局員の座を手にする形となった。

**蔡奇氏** 2段跳び政治局員昇格の離れ業の構造

- ① 2016.10 王安順北京市長（江沢民派）左遷 ⇒後任の北京市長代理に蔡奇氏
- ② 2016.11 蔡奇氏を北京市長に選出
- ③ 2017.5 郭金竜北京市書記（共青团派）退任 ⇒蔡奇氏北京市書記に

(2) ポスト習近平と言われた胡春華の対抗馬として急浮上した陳敏爾氏<sup>びんし</sup>  
習近平氏の浙江省時代の腹心であった陳敏爾氏は、共青团派がポスト習近平とみなして育て上げてきた胡春華氏が次世代の最高指導者となることを阻止するための若手有力候補として習派が引っ張り上げようとしてきた指導者として知られる。地方のトップ指導者を経験させるため、まず2012年に貴州省に副書記として送り込み、翌2013年に省長に昇格させた。2015年にはトップである党委書記となることに成功した。だがこのままでは政治局員になることすらおぼつかなかった。そこで、目を付けたのが政治局員の資格を持つ有力地方トップへの更なる転出であった。

党大会が開催される3か月前の2017年7月、やはりポスト習近平とみなされた実務派の若手指導者で政治局員の孫政才重慶市党委書記が突然失脚した。当初、孫政才氏の失脚の具体的な理由が明らかにされず、この失脚には様々な憶測が流れたが、そして、果たせるかな空席となった重慶市党委書記のポストに陳敏爾氏が抜てきされたのであった。重慶市のトップ



は政治局員のポストであるため、党大会で陳敏爾氏は政治局員となった。その若さから、5年後に習近平氏が定年を迎え引退する場合には、胡春華氏と十分張り合う資格を得たことになる。今回の党大会をめぐるのは、陳敏爾氏が胡春華氏と共に政治局常務委員にまで昇格するとの憶測も流れたが、結局、いずれも昇格できず痛み分けとなった。習近平氏自身が終身最高指導者のポストに留まりたいのではないかという観測も広がっていたが、今回の党大会で結局両者が50歳代のうちに政治局常務委員に昇格できず、将来、最高指導者として2期務める資格を失ったことは、そうした観測を裏付けるものだとも言えよう。

**陳敏爾** 政治局員昇格のからくり

- ① 2017.7 孫政才重慶市書記失脚 ⇒陳氏を後任の重慶市書記にはめ込む
- ② 2017.10 政治局員に昇格

以上は、今回習派の指導者が出世をするために、障害となった指導者が犠牲になるという構図を2例示したものである。蔡奇氏の政治局員入りは、王宝順北京市長の左遷が布石となった。陳敏爾氏が政治局員入りするためには、孫政才重慶市書記の失脚が欠かせなかった。同様のケースはまだほかにもあり、習派の権力掌握に対する非習派の反発を招く要因にもなっていると推測される。ここでは、もう一つの例として、軍の制服組トップに昇格した張又俠<sup>ゆうきょう</sup>氏のケースを挙げてみたい。

(3) 幼馴染の親友、張又俠氏を制服組トップに昇格させた人事

習近平氏の幼馴染で、1960年代に文化大革命で父親が批判され苦しい立場に立たされた習近平氏が共に励まし合う仲間として強い絆で結ばれたとされる張又俠中央軍事委員会装備發展部長を、制服組トップの中央軍事委員会副主席に昇格させることは、習近平総書記にとっても「恩返し」の意味を持つ、念願の人事だったと言われる。ただ、張氏を副主席に昇格させるためには、ライバルであった房峰輝<sup>ぼうほうき</sup>統合參謀部參謀長の存在が障害

となった。房峰輝氏は胡錦濤前総書記の下で出世し、実力派の軍幹部として副主席のポストにより近い人物と目されていた。ところが、房峰輝氏は党大会開催の2か月前、2017年8月下旬に突然失脚した。房氏は失脚直前の8月15日には、中国を訪問した米国のダンフォード米軍統合参謀本部議長の歓迎式典を行い、会談を行なうなど失脚の気配を微塵も見せなかった。

房氏の突然の失脚で、他に有力な軍副主席候補がいなくなり、張又俠氏は難無く軍事委副主席の座を射止める結果となった。

**張又俠** 軍事委副主席昇格のからくり

- ① 2017.8 房峰輝統合参謀部参謀長の失脚＝軍事委副主席有力候補の消滅
- ② 2017.10 中央軍事委副主席、政治局委員に昇格

## 5. 5年後に政治局員として習近平指導部を固める有力候補者たち

前述の図表9を見ればわかるが、現在は習派が圧倒的多数を占めている政治局員のポストだが、68歳定年という不文律が守られると仮定すれば、5年後は大きく様変わりする。

まず、9名が定年の年齢に達し引退することになるが、そのうち6名は習派である。また、現在政治局常務委員である栗戰書氏と韓正<sup>りつせんしよ</sup>氏の2名、そして厳密に言えば習近平氏自身も定年に達するため、残された政治局員から2～3名が政治局常務委員に昇格することになる。習近平氏が定年の不文律を守らずに、「特例」として続投する場合は、これまでのいきさつや年齢から、胡春華氏と陳敏爾氏が政治局常務委員に昇格する可能性が大きい。

こうした欠員を補充するため、習派は5年後には新たに少なくとも7名、できればそれ以上の次期政治局員候補を確保しなければ、権力構造が再び組織力のある共青团派など別派閥の優勢に傾くことになる。そこでこうした5年後に生じる政治局員の空席を埋めるための人選が既に固まりつ

つあることも、今回の人事異動から見て取ることができる。

つまり前述の図表6で示したように、習近平氏とつながりが深い若手習派の部下たちが、今回の党大会で次々と中央委員に選出され、次期政治局員候補としての準備態勢に入っていることも浮かび上がっているのである。(図表10参照)

図表10 次期政治局員入りをめざす若手習派指導者

指導者名	年齢	5年後	現在の肩書き	備考
バヤンチョル	62	67	吉林省党委書記	モンゴル族
劉賜貴	62	67	海南省党委書記	元国家海洋局長
鐘山	62	67	商務相	経済専門家
苗華	62	67	中央軍事委員	軍事委副主席候補
韓衛国	61	66	陸軍司令員	軍事委副主席候補
劉奇	60	65	江西省長	他派閥牙城に切込み
応勇	60	65	上海市長	司法の専門家
王小洪	60	65	公安部次官	公安部長候補
丁来杭	60	65	空軍司令官	軍事委副主席候補
楼陽生	58	63	山西省長	他派閥牙城に切込み
徐麟	54	59	党中央宣伝部副部長	ネット管理トップ

\* 党大会開催時に68歳に達していれば定年とされる

## 6. 習近平氏はなぜ自派勢力を拡大しえたのか

### (1) 権力闘争の変遷

今回の19回党大会で習派は、強引とも見える人事操作を行い、習近平氏と個人的につながりが深い指導者を大量に最高指導部の地位に就かせることになった。習近平氏は既に、中国共産党の指導者の中で「1強多弱」の体制を形成することに成功したといえる。

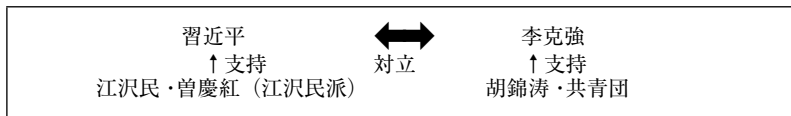
それにしても、そもそも習近平氏という指導者は、10数年前までは、海外ではあまりその名が知られず、最高指導者候補としては無名の存在

だったと言っても過言ではないだろう。その習近平氏がなぜ、毛沢東や鄧小平をも凌駕しかねないほどの指導者になりえたのか、それを深く理解する上で、まず、習近平氏が頭角を現したころからの時代背景と、その中で習氏がどのような手を打ってきたのかについて振り返る必要がある。

前任者の胡錦濤総書記の時代の権力闘争は、院政のごとくさらに上から政治を支配しようとした江沢民元総書記を中心とした江沢民派と、共産主義青年団出身者という党内組織を背景にした胡錦濤派、つまり共青团派との間でしきりに繰り返り広げられた。実は、胡錦濤氏は江沢民氏によって後継指名されたのではなく、1989年の天安門事件の後、江沢民氏を上海市党委員会書記から総書記に抜擢した当時の鄧小平氏が、江沢民氏の後継者として胡錦濤氏をも抜てき・指名したといういきさつがあったことも、双方の対立を根深いものにした。

2012年に退任する胡錦濤総書記の後任として、江沢民派は当初、江沢民派のホープとされ政治局員で上海市党委員会の書記を務めていた陳良宇<sup>りょうう</sup>氏を候補に立てようとしていたとされるが、陳氏は共青团派の汚職摘発によって17回党大会の直前にあたる2007年7月に失脚した。当時、胡錦濤総書記は、同じく共青团出身で愛弟子にあたる李克強副首相（当時）を後継者に据えようと考え、陳氏を失脚に追い込んだのである。しかし、江沢民派は上海に隣接する浙江省で党委員会書記を務めていた習近平氏を急きょ後任の上海市党委員会書記にすげ替え、習近平氏を陳氏に代わる江沢民派の後継者に仕立て上げる形となった。このため、当初の権力闘争の構図は、共青团派が推す李克強氏と江沢民派が推す習近平氏が対立する形になって現れた。（図表11）

図表 11 第一段階（17回党大会 2007年以前）の対立構造



この段階では、習近平氏は江沢民元総書記やその側近の実力者であった曾慶紅元国家副主席に支持される形で登場し、17回党大会では共青团が支持する李克強氏と共に50歳代で政治局常務委員に抜てきされた。ただその時の党内序列が、習近平氏の方が李克強氏よりも上位だったため、その段階で習近平氏が次の総書記候補であることが明確になり、習氏は江沢民派の継承者、擁護者として、共青团派の李克強と対立するとの見方が当時広く伝えられた。

ところが、習近平氏はその後、胡錦濤総書記の下では目立つ動きは見せなかった。中国では、次期有力候補者が完全に権力を掌握する前に、権力に執着する素振りを見せることは失脚にもつながりかねない。このため、国家副主席として政治局常務委員に昇格した後も、習氏は胡錦濤氏や李克強氏に刃向う態度を差し控えていたのだろうと考えられる。

ところが2012年の18回党大会を経て、習近平氏が総書記として党の最高地位に就くと、習近平氏＝「江沢民派の代表」という見方が大きく覆される形になった。習氏はあるうことか「反汚職キャンペーン」を展開し、その摘発の矛先を、利権をむさぼり権力を乱用して私腹をこやしてきた江沢民派に向けたのである。筆者が中国の政治事情に詳しい中国人ジャーナリストらから聞き取り調査を行った結果、この変節の背景には、2012年の党大会を前に、クーデターまで計画し習近平から権力を奪取しようとしたとされる薄熙来氏（当時、政治局員で重慶市党委員会書記）の摘発があったという。薄熙来氏は薄一波元副首相の子息で、習仲勳元副首相の子息である習近平氏とは少年期に兄弟のように付き合っていた。年長の薄熙来氏が「兄」であり、習近平氏が「弟」の関係であった。薄熙来氏には自らが江沢民派の代表として共産党総書記の座に就こうと言う野心があったことから、胡錦濤総書記を中心とする共青团と鋭く対立していた。その一方で、江沢民派のホープ陳良宇氏が失脚した後、江沢民派が後継者に習近平氏を推したことに薄熙来氏は強い不満を抱いていた。このため、江沢民派や太子党の間では、習近平氏側につくのか、それとも薄熙来氏側に就

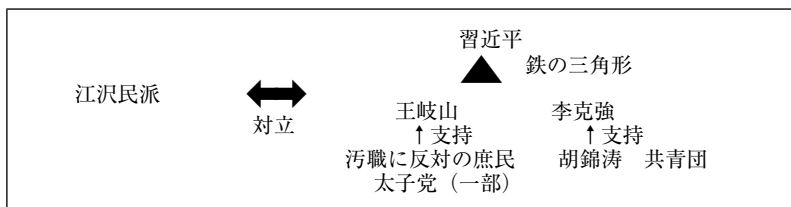
くのか身内の分断が起きていた。

こうした江沢民派や太子党内部の分断を利用したのが胡錦濤総書記ら共青团派だったと筆者は分析する。習近平氏の登場以前から、薄熙来氏が共青团の脅威となり得ると見ていた胡錦濤総書記は、薄熙来氏が2004年2月遼寧省長から中央の商務部長（商務相）に異動すると、直後の同年12月、懐刀の李克強氏を河南省党委員会書記から遼寧省党委員会書記に送り込んだことが、中国共産党の公表した両者の経歴からも見て取れる。李克強氏は遼寧省で薄熙来氏が行った警察権力の乱用や不正をことごとく調査し、その後薄熙来氏を失脚に追い込む貴重な材料を収集したのだ。

2007年次期総書記候補となった習近平氏にとって、最大の脅威は対立派閥と目された共青团の李克強氏ではなく、むしろ「謀反」を企てつつあった薄熙来氏だったと考えられる。そこで、2012年習氏が総書記に昇格する18回党大会を前に、薄熙来氏の失脚を目指した習近平氏と共青团側が手を握るという構図ができたと考えられる。

この薄熙来事件を契機に、中国共産党の最高指導部の権力対立の構造は図表5のような形になり、習近平氏は共青团と手を組み、汚職腐敗にまみれた江沢民派の権力者たちを次々と摘発する新たな段階に発展した。習近平氏の反汚職キャンペーンには、習近平氏が下放青年時代に、義兄弟の契りを結んだとされる王岐山<sup>きざん</sup>氏が大きな役割を果たすことになった。

図表12 第二段階（18回党大会以降）の対立構造



つまり初期の習近平指導部においては、習近平氏と李克強氏、王岐山氏

の3人のトロイカ体制（これを中国では「鉄の三角形」と呼ぶ）が形成され、江沢民派を中心とした反腐敗キャンペーン対策に対する抵抗勢力との権力闘争が展開された。（図表 12）

「虎（大物幹部）もハエ（末端幹部）もたたく」と銘打った習近平指導部の反腐敗キャンペーンは、やがて全国的な展開を見せ、「党支配強化のための綱紀肅正運動」という胡錦濤元総書記ら共青团側の思惑を超えて、政敵を失脚させる政治闘争の手段としても作用する結果になった。

19 回党大会に合わせて中国共産党中央規律検査委員会副書記である楊 曉 渡ようぎょうと監察部長（監察相）が、2017 年 10 月 19 日に記者会見を開き、過去 5 年間で 153 万名以上の党員を処分したことを明らかにした。党中央委員と中央委員候補委員以上の処分者は 43 名に上るとした。<sup>5</sup> これより前の同月 9 日党中央規律検査委員会は党大会に提出する活動報告を採択した。その中では、2017 年 6 月までの 5 年間に摘発された政府幹部は次官級以上の高官が 280 余名、局長級の官僚が 8600 余名、課長級 6 万 6000 名に上るとした。<sup>6</sup>

図表 13 は、一連の反腐敗キャンペーンで摘発を受けた中国共産党や国家機関などの最高幹部をまとめたものだが、圧倒的に江沢民派が多く、中でも江沢民派の中の石油派と呼ばれる周永康氏に絡む汚職しょうけつびんでは、蔣潔敏氏を始め多くの失脚者を出した。またこうした反腐敗キャンペーンによって、利権をもとに勢力を拡大した江沢民派は大打撃を受け、習近平主席への「絶対忠誠」を唱えることで、難を逃れようとする「寝返り幹部」も相次いだ。

図表 13 摘発された主な最高幹部と属性（肩書きは摘発時点のもの）

摘発発覚時期	幹部名と失脚時の肩書き	属性
9 月	蔣潔敏 国有資産監督管理委员会主任	■江沢民派
2014 年 6 月	徐才厚 前中央軍事委員会副主席	■江沢民派
7 月	周永康 前政治局常務委員	■江沢民派

12月	令計画	政治協商会議副主席	☆共青团派
2015年7月	周本順	河北省党委員会書記	■江沢民派
7月	郭伯雄	前中央軍事委員会副主席	■江沢民派
2016年3月	王 珉	遼寧省党委員会書記	■江沢民派
9月	黄興国	天津市党委員会代理書記	★習派
2017年7月	孫政才	重慶市党委員会書記	実務派
8月	房峰輝	統合参謀部参謀長	☆共青团派

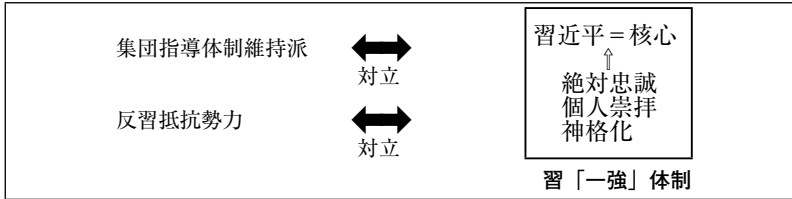
新華社などの報道をもとに筆者作成

このため反腐敗キャンペーンは、習派にとって、政敵を排除する手段としてだけでなく、習近平個人に対する「忠誠」や「個人崇拜」を加速させることにもつながった。2016年からは、習近平氏を別格の指導者として称える動きが強まった。そして現在では、習近平氏を「党中央の核心」として、他の政治局常務委員より格上の存在と位置付け、習近平氏が事実上最終意思決定者としての権限を手にした。将来的には毛沢東にも匹敵する終身最高実力者の地位をめざしているように見える。

現在の最高指導部における権力構造は、習近平との縁故関係に近い側近らによる一強指導体制を固める主流派に対して、①毛沢東の死後、文化大革命への反省から貫かれてきた集団指導制の維持を求める反主流派、そして②反汚職キャンペーンなどによって自らの既得権益を奪われることに反発する反習抵抗勢力という両者が対立するという構図に固まりつつあると筆者は分析する。ただ、目下のところ習一強体制を形成する主流派が圧倒的な権力を掌握し、他を押し退けているといえよう。(図表 14 参照)



図表 14 第三段階（2016 年～現在）の対立構造



中国経済が比較的安定して成長していることもあって、中国国民の所得や消費が増し、国民たちの習近平指導部に対する評価はさほど悪くない状況が続いている。これは習近平氏が権力を強める上で追い風となっており、習近平指導部としてはそうした世論が、反政府の方向に向かわないよう、国民受けする政策や都合が悪い情報を遮断する言論統制の強化などによって権力を維持しようとする動きが顕著化している。

### (3) 習指導部が権力集中のために実行した数々の手段

前述したように、共青团派とも手を組む形で始まった反腐敗キャンペーンは、やがて最大勢力であった江沢民派を瓦解させる結果となったが、それは見方によっては習近平自身の勢力を拡大する上で障害となる政敵を排除する動きにもつながった。

中国を事実上一党独裁体制で支配してきた中国共産党の内部には腐敗がはびこり、幹部本人はもとより、その親族が権力に乱用し不正な蓄財をすることがごく当たり前のように行われてきた。つまり親族まで調べ上げれば、不正が見つからない幹部を探す方が難しいという実態の中では、誰を摘発し、誰を目こぼしするかは取り締まる側の裁量次第という側面が大きかったと言える。

その意味で、反腐敗キャンペーンは、習近平氏が自らに権力を集中させる上で、最も好都合な手段の一つとなったことは間違いない。それはそこまで中国社会が腐敗しきっていたことこそが習近平氏への権力集中を助長

させる素因になったといえる。

習近平総書記は、青年期下放からもどり一時期国防相の秘書を務める形で軍籍を持っており、元来軍内にも一定の支持基盤があるとされたが、特に、軍内の江沢民派のボスの存在だった徐才厚・郭伯雄じょさいこう かくはくゆう両元軍事委員会副主席という制服組ツートップを肅清するなど、反腐敗キャンペーンを軍に対しても行うことで、軍内の抵抗勢力を次々と抑え込んでいった。そして、2016年初頭に軍の組織改編を強行し、7大軍区を5つの戦区に塗り替えた。軍の指導者の配置換えや昇格などの「鞭と飴」の両面から人事操作を巧みに行うことで軍への主導権をほぼ確保したといえる。

また既得権益にこだわる行政官僚の抵抗を抑え込むため、中国共産党内部に、個別に行政官庁を指導する「指導小組」と言われる組織を立ち上げ、その多くのトップになることで、本来は国務院総理である李克強氏が指揮する行政組織にまで、習近平氏が直接指導する体制を作り上げた。(図表 15 参照)

図表 15 習近平が就いている主な役職と「指導小組」

権力分野	トップポスト	人名	
中国共産党	総書記	習近平	
国家	国家主席	習近平	
人民解放軍	中央軍事委主席	習近平	
党指導小組		発足	組長
中央財經領導小組	1980	經濟政策	習近平
中央全面深化改革領導小組	2013.12	經濟体制改革	習近平
中央国家安全委員会	2014.01	中国版NSA	習近平
中央ネット安全情報化領導小組	2014.02	ネット管理	習近平
中央外事工作領導小組	1981	対外政策	習近平

中国共産党の発表に基づき筆者が作成

習指導部が、習近平氏を「別格」の指導者として国民に認知させようと2016年初頭に始めた習氏と「党の核心」と位置付ける運動も、習氏への

権力集中と個人崇拜をめざす最初の動きとして注目された。当初、習近平氏を「党の核心」と呼ぶ運動は、習氏と関係が親しいとされた地方指導者が、地元の会合で発言し、それを地元各地の新聞に掲載させることで全国規模で広く国民に知らせ、盛り上げて行こうという試みだといえた。

最初に発言したとされるのは、習氏の側近中の側近と言われ政治局員入りを目指して天津市の代理書記についていた黄興国<sup>こうこうこく</sup>氏で、「習近平総書記という核心を断固として擁護する。習総書記の号令に従う」と地元幹部を集めた会議で演説した。これを皮切りに四川省、安徽省、広西チワン族自治区などの指導者が次々と同様の発言を行い、習近平氏を「党の核心」と呼ぶ運動が広まった。(図表 16 参照)<sup>7</sup> (黄興国氏はその後、天津で起きた大爆発事故の責任や自らの不正を問われ失脚している。)

習氏は、このように地方の新聞を有効に利用するなど、自らの権力拡大を有利に進める一方、国民の反発を受けないための世論工作に対しても、反腐败キャンペーンに匹敵するほど大きな力を割いてきたと言える。つまり、自分に有利なプロパガンダの拡散・浸透と、逆に自分に不利な情報の徹底的な抑え込みをはかる言論統制であった。

図表 16 習氏を「党の核心」と発言した指導者と報道

日付 (2016 年)	地域	発言者	報道
1/8 1/11	天津市	黄興国代理書記	天津日報1/12
1月11日	四川省	王東明書記	四川日報1/12
1月13日	安徽省	王学軍書記	安徽日報1/14
1月13日	広西チワン族	彭清華書記	広西日報1/14
1月14日	西安市	魏民洲書記	西安日報1/15
1月16日	湖北省	李鴻忠書記	ネット情報
1月22日	中国銀行	田国立書記	金融時報1/23
1月29日	内モンゴル	王君書記	内蒙古日報1/30

## 7. マスメディアの完全掌握と言論統制強化

### (1) 党中央宣伝部を自派勢力で占拠

習近平氏が中国共産党内における自らの権力基盤を固めるために極めて重視した部署が2つある。1つは前述したように党内の人事を管理する中央組織部で、最も信頼できる大学時代のルームメイト、陳希氏を副部長に送り込み、人事面から習派の権力掌握に大きな道筋を切り開いた。そしてもう1つは、党のプロパガンダを担当する党中央宣伝部だった。党中央宣伝部は、中国の新聞・テレビ・インターネットそれに書籍など全ての情報伝達手段を管理・統括する組織だ。自分に有利な情報を、様々なメディアを通じて国民に発信する一方、不利な情報は全て遮断するという徹底した情報統制を目指したのである。

2012年に習近平指導体制が最初に発足した後、党の宣伝部門を取り仕切ってきたのは、劉雲山<sup>うんざん</sup>政治局常務委員とその部下劉奇葆<sup>ほう</sup>宣伝部長だった。この二人は江沢民氏ないし胡錦濤氏らに近い幹部と言われてきた。ただ、総書記になりたてだった習近平氏がこの2人の人事にいきなり手を付けることは難しかった。そこで習氏は、この2人の下で働く数名の党中央宣伝部副部長たちを習派によって塗り替える作戦に出たのである。その先兵となったのが、2013年習近平氏が中央宣伝部に真っ先に送り込んだ黄坤明<sup>こうめい</sup>氏だった。黄氏は習氏が福建省の地方幹部だった頃から仕えた腹心中の腹心で、習氏は、翌2014年には当初は副部長の中でも序列が低かった黄氏を、筆頭副部長に昇格させ中央宣伝部人事の急所を押えた。そして2015年には習氏が信頼を寄せる4名の地方幹部らを一気に中央宣伝部の副部長に抜擢し、主導権を握ったのである。新たに吸い上げた4名のうちの1人目は習氏が10年前上海市のトップである党委員会書記だった頃に、上海市人民政府の下級官僚の中から見出し、同市宣伝部長に破格の昇進をさせた徐麟<sup>じょりん</sup>氏である。徐氏は副部長に就任後、中国の情報管理には欠かせないインターネットの監視と規制を担当しており、今回の党大会では中

央委員に昇格した。

2 人目はかつて南部広東省の宣伝部長だった<sup>たしん</sup> 庾震氏だ。庾震氏は、地元広東省の週刊新聞「南方週末」が2013年初、憲法に基づく民主主義の実現を訴える社説を掲載しようとしたのを、途中から強引に差し止めた「南方週末社説差し替え事件」の責任者として知られた。問題の社説は、習近平氏が掲げた政治スローガン「中国の夢」を風刺して、「中国の夢、憲政の夢」と題し、中国が西側のような議会制民主主義を目指すべきだと示唆することで暗に習近平指導部のやり方を批判するものであった。これに気づいた庾震氏は、印刷直前だった原稿を差し止めて、習近平指導部の政策をたたえる全く別の内容に差し替えて掲載させた。これに対して、新聞社の記者たちが職場放棄を行い、中国の多くの知識人やジャーナリストたちが強く批判する騒ぎになったが、庾震氏は習主席への忠誠心を崩さず、苦境を乗り切ったことが評価された。

3 人目は、陝西省の宣伝部長だった<sup>けいしゅんかい</sup> 景俊海氏だ。陝西省は習主席と縁が深く、陝西省出身の党幹部と習主席の結びつきが強いことは既に記した。

4 人目は、中国中央テレビ局の局長だった<sup>じょうしんせき</sup> 聶辰席氏だ。聶辰席氏は2016年9月、新聞・テレビ・出版・ネットなどを全て管轄する政府機構、国家新聞出版ラジオテレビ総局のトップを兼任する中央宣伝部副部長のポストに就いた。聶辰席氏が習氏に評価されたのは、中国中央テレビ局の局長だった2016年2月、同テレビ局を習主席が視察した際、「絶対忠誠を尽くすのでどうぞ検閲して下さい」と露骨に服従する表示をロビーに掲げたほか、習政権が打倒した腐敗幹部を次々にテレビに出演させカメラの前で後悔の弁を述べさせる番組を放送するなど、習主席の実績を強くアピールしたことが評価されたと考えられる。<sup>8</sup>

このようにして、中国のメディアを統括する党組織の中央宣伝部は、わずか数年間の間に、副部長クラスの主要ポストを「習派」に押さえられる形となった。そして、2017年の党大会と1中全会を経て、党の宣伝部

門を統括していた政治局常務委員で非習派であった劉雲山氏が引退するや、共青团派の劉奇葆<sup>ほう</sup>氏を中央宣伝部長と政治局員のいずれの座からも引きずりおろし、習氏の腹心で筆頭副部長だった黃坤明<sup>こうこんめい</sup>氏が、それに取って代わり中央宣伝部長と政治局員の座に昇格した。中央宣伝部は完全に習派の軍門に下ったのである。

#### 党中央宣伝部人事の推移

政治局常務委員 (宣伝担当)	☆劉雲山	(共青团派+江派)	⇒ 2017年引退	×
中央宣伝部 部長	☆劉奇葆	(共青团)	⇒ 2017解任	中央委員に降格 ×
副部長	★黃坤明	2013 (習の懐刀)	↑	2017部長に昇格
	★徐麟	2015 (習の秘蔵っ子)	↑	2017中央委員に昇格
	★庾震	2015 南方週末の社説事件で習が評価		
	★景俊海	2015 (習一族に近い陝西出身者)		
	★聶辰席	2016 絶対忠誠の CCTV 局長として習が評価		
	☆共青团派		★ = 習派	

## (2) 報道機関に絶対忠誠を求め最大限の圧力を実施

習近平指導部が自らの権力拡大を進める上で、極めて重視した政策の一つに際立った言論統制が挙げられる。もともと中国共産党の支配下では、言論の自由なるものは存在しないが、それでもその時々政権には締め付けの度合いに幅があった。習近平指導部が進めている言論統制は、中国が1978年に改革開放政策に転換して以来、1989年の天安門事件直後の一時期を除けば、最も厳しいものではないかと考えられる。

その典型的な例が、習近平指導部が発足翌年2013年、中国全土のジャーナリスト約30万名を対象に実施した「マルクス主義ニュース観」を学ばせる一大研修だろう。上下2冊、70万字にも及ぶ膨大な教科書を学習させ、研修後に実施する試験に合格しなければ、記者などジャーナリストとしての活動の継続を認めないという極めて大がかりで徹底した要求だった。<sup>9</sup>

2016年2月、習近平氏は、中国共産党機関紙人民日報と国営通信新華社、そして中国国営テレビCCTVを視察した後、人民大会堂に報道機関の責任者ら約180名を招いて「報道・世論工作座談会」を開催した。こ

の席で演説した習氏は、「報道機関は党の代弁をせよ」との趣旨の要求を行った。(原文は「党媒姓党」——直訳：党のメディアは党の姓を名乗れ)これに対しては、一部メディアやインターネット世論から反発や批判の声が上がり、同月末には、中国国内のインターネット上に習近平氏の辞任要求まで書き込まれる騒ぎになったが、結局は抑え込まれてしまった。<sup>10</sup>

習近平指導部がかように言論統制に必死になる理由の一つに、習指導部が進めてきた反腐敗キャンペーンとも関連があると筆者は考えている。反腐敗キャンペーンは、権力を乱用して私腹を肥やした腐敗党员・官僚を容赦なく取り締まるということで、習近平指導部が自派の勢力を拡大する原動力となり、また党员や役人の深刻な腐敗に強い不満を抱く国民の人気取りにもなってきた。ただ、中国の最高指導部の中で親族も含めて完全に潔白な人を探すことは難しいと言われるほど汚職がまん延していた中国社会では、取り締まる側の方も汚点を抱えていることが少なくなかった。実際、2016年4月、タックスヘイブンと呼ばれる租税回避地の利用者に関する機密文書「パナマ文書」が、国際調査報道ジャーナリスト連合(ICIJ)によって公開された。その中には習近平氏の親族も含む政治局常務委員3名の関係者の名前が記されていたのである。<sup>11</sup>もし摘発を受けてきた人たちがその事実を知れば、「摘発側自身のことを棚に上げ、なぜ自分たちばかりひどい目にあうのか。反腐敗キャンペーンはしょせん政敵を倒すための粛清ではないか」と疑われかねない状況だった。また、こうした「不都合な真実」が国民に知れわたれば、自ら先頭に立って反腐敗キャンペーンを進めている習近平氏は信頼を失い、指導者としての威厳が保てなくなりかねない。そこで、習近平指導部は、自らに有利な情報を強く発信する一方、不都合な事実は全て覆い隠せる体制を強化しようとしてきたと考えられる。

### (3) 習近平氏神格化の方向に進むのか

2017年秋、習近平指導部は、綱紀粛正や体制強化を求める「『8項目規

定』の実施細則」を新たに通達し、その中で、新聞・テレビの報道について、習主席だけを特別扱いするよう事細かに定めた。<sup>12</sup>「8項目規定」というのは、2012年12月、総書記に就任した直後の習氏が幹部に綱紀粛正を求めて出したもので、今日振り返れば、この規定こそが、その後大々的に繰り広げられた反汚職キャンペーンや言論統制の出発点となった。

今回新たに通達された「8項目規定の実施細則」は、2012年に出された規定の中身をさらに細かく具体化したものといえる。何より注目すべきはこの「実施細則」の3分の1が、新聞・テレビのニュース報道に関する指示によって占められていたことだった。習主席以外の指導者の報道を極力簡素化させる一方、習主席だけを別格扱いとして意図的に大差をつけるよう求めている。例えば全国レベルの会議に関する報道は、習主席以外の政治局常務委員が出席したものは、原稿の文字数を1000文字以内。中国中央テレビ（CCTV）の場合、夜7時の主要ニュースの放送時間を2分以内に抑えなければならない。一般の政治局員のみが出席した会議に至っては新聞原稿が500文字以内。CCTVは夜7時の主要ニュースでは報道せず、夜遅くのニュースで1分以内に放送するよう定めている。その一方で、習主席については、原稿の文字数やニュースの放送時間に制限がなく、どれだけ大きく扱っても構わないことになる。

また、会議で指導者が行った発言をテレビで報道する際には、習近平氏のみ、その声をそのまま生で放送することができるが、その他の指導者については生の声は使用できないとしている。「実施細則」にはこのほかにも、習氏とその他の指導者の報道に差をつけるよう、事細かな決まりが列挙され、これは習氏だけを別格扱いにすることで習氏を神格化して行こうとする最初の布石ではないかとの見方も強まっている。

実際、中国の地方メディアの中には、この通達に過剰反応するところも出てきた。貴州省南西部の新聞「黔西南日報」は2017年10月10日の1面に習主席の顔写真を大きく掲げ「偉大な領袖習近平総書記」という説明を付けた。さらに習主席の肖像を教室に掲げて授業を行う地元の学校の写



真まで掲載した。「偉大な領袖」とは、かつて神格化された毛沢東につける枕言葉で、授業風景の写真も、毛沢東が発動した文化大革命の時代を思い起こさせるものだ。このまま習近平氏の権力が強化されてゆけば、やがてはかつての毛沢東のようにあがめられる神格化による個人の専制政治体制へと進むのではないかと懸念する声も出始めている。

## 8. まとめ

本論では、2017年10月に開催された中国共産党の第19回党大会とそれに続く中央委員会総会（1中全会）によって決まった、2期目の習近平指導部の人事を詳細に分析することで、習近平氏を中心とした習派の実態と権力掌握の度合いを分析した。また、習近平指導部が、5年後、10年後を見据えて、自派が勢力を維持できるよう、人事面で着々と手を打っている実態も浮き彫りにした。

習派は反汚職キャンペーンを自派の勢力拡大に利用した具体例も3例とりあげ、反汚職キャンペーンが、単なる綱紀粛正運動ではなく、権力闘争の道具に使われている側面があることも示した。同時に、習近平氏自身も含めた自派に対する不都合な情報が伝わらないよう、徹底した言論統制を進めている実態を示しつつ、それが習近平氏の神格化につながりかねない懸念を呼んでいる実態も明らかにした。

2018年2月には習近平氏の3期続投を可能にするためか、「国家主席の任期は2期まで」と定めた憲法の条文を削除する改正案も示された。

果たして中国はそのまま習派の専横政治の舞台になるのであろうか。中国共産党には9000万名近い党員がいる。だが、その中で今日優遇されている「習氏と縁故がある指導者」の数は一握りに過ぎない。そのような偏りのある集団が強い権力を掌握し、専制政治を行うことを、そのほかの党員や国民がいつまでも許しておくとも思えない。だが、その危うさを一番自覚しているのは、習近平氏とそれを取り巻く側近たちであろう。いかに

して自派の権力を確実に維持し続けられるか、今後、人事面や言論統制の面で、さらなる手を打つこともあり得るだろう。ただ、中国はもはや毛沢東の時代のように、国民の耳を完全にふさぐことはできない。年間1億人以上の国民が香港を始め海外に旅行し、自由な社会を体験している。国内に入らないよう厳格に遮断している「不都合な情報」も、国外に出れば容易に得ることができる。しかも中国国内ではインターネット化が急速に進み、ネットを利用した情報のやり取りは、既に、日本をはるかに超えているとも言われている。そのような時代の変化の中で、中国を統治する中国共産党が、果たして「神格化」やイデオロギーによって国民を支配できるかどうかは極めて疑問である。中国共産党の頂点に立つ習近平氏にとっては、今後、自派勢力の権力を維持強化することに加えて、中国共産党による事実上の一党独裁体制をどこまで守り続けられるかという新時代の厳しい挑戦を受けることになるだろう。

#### 注

- 1 新華社 2017年10月24日報道
- 2 新華社 2017年10月25日報道
- 3 新華社 2017年10月24日報道
- 4 各指導者の属性については、複数にまたがるケースや、他の分類をしている研究や報道もあるが、ここでは論を明確にするため、筆者が最も色彩が濃いと分析する一つに色分けすることにする。特に共青团の経歴がなくても胡錦濤前総書記側近など共青团派と密接な関係がある指導者は共青团派に分類。逆に共青团の経歴があっても習近平氏とのつながりが深いと判断された指導者は習派に分類した。
- 5 新華社 2017年10月19日報道
- 6 中央規律検査委員会 HP  
[http://www.ccdi.gov.cn/special/yjddsjd/fjdwn\\_fjdwn/201710/t20171009\\_108453.html](http://www.ccdi.gov.cn/special/yjddsjd/fjdwn_fjdwn/201710/t20171009_108453.html)
- 7 拙著『霸王 習近平 メディア支配・個人崇拜の命運』展望社 2016年 P31～33

- 8 日本新聞協会発行『新聞協会報』2017年1月24日第2面「中国メディア事情」報道
- 9 拙著『霸王 習近平 メディア支配・個人崇拜の命運』展望社 2016年 P81～98
- 10 拙著『霸王 習近平 メディア支配・個人崇拜の命運』展望社 2016年 P14～51
- 11 日本新聞協会発行『新聞協会報』2016年4月19日第2面「中国メディア事情」
- 12 日本新聞協会発行『新聞協会報』2017年12月19日第2面「中国メディア事情」

